様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：４４４２８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０４３３６

研究課題名（和文）多文化化の状況要因を踏まえた多文化共生保育実践の多様性の把握枠組みの精緻化

研究課題名（英文）Minuting the Framework for integrated understanding in diversity of multicultural education in early childhood and description of the practice

研究代表者
卜田　真一郎（SHIMEDA, SHINICHIRO）

常磐会短期大学・その他部局等・教授

研究者番号：２０３５３０２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、多文化共生保育の多様さを記述する枠組みの構築を目指した2014年度までの研究成果を踏まえ、当初の枠組みを精緻化することを目指し、次の課題に取り組んだ。①様々な種類のマイノリティに関わる人権保育の多様な実践との対話を通じた視点の豊富化、②イスラームとの共生に着目し、価値観や宗教の違いによる文化摩擦を乗り越え、共生を実現するための保育の検討、③保育者自身の当事者性と多文化共生保育実践のありようを検討するため、来日第二世代保育者のアイデンティティの揺れと、その揺れに伴いつつ深化する外国人保育者としてのキャリア形成の過程のTEM(複線経路・等視性モデリング)による描出。

研究成果の概要（英文）：The goal of this research project was to refine the framework describing the diversity of multicultural childcare. For the purpose, three lines of research activities were conducted.
(1) According to various human right practices, guest speakers brought their various viewpoints on several minorities. (2) For realizing more harmonious life with Muslim, ways of childcare practices were discussed to overcome difficulties due to multiple values and religions. (3) Looking both varieties of multi-cultural childcare and varieties of identity of childcare specialists, the narratives of career development of them who experienced migration to Japan as children were depicted using TEM (Trajectory Equifinalithy Modeling), including seeking process of their identity.

研究分野：幼児教育学

キーワード：多文化共生保育　人権保育　多様性　イスラームとの共生

１．研究開始当初の背景

日本における多文化共生保育の研究は、1990 年における出入国管理及び難民認定法改正をきっかとした外国人の子どもの保育問題が検討され始めた当初の「新たな保育ニーズを受け、どのように保育を展開するのかという段階」を経て、「国際化する保育の質をどのように高めるのかという質の向上の問題」に移行していると指摘される（品川, 2011）。多文化共生保育の実践は各園の多文化状況によって相当に異なることが予想されるが、「質の向上」のためには、各園の状況に即応した実践の方向性を検討することが重要である。こうした問題意識から、本研究に先立つ2012年度から2014年度までの研究「多文化共生保育実践の多様性を統合的に理解するための枠組みの構築」では、多文化共生保育実践の俯瞰的把握のための枠組みの構築を目指し、「差異の可視性（子どもの使用言語・文化的背景・容姿などの目に見える違いが、園やクラスの集団においてどの程度高いかという要因）」に着目し、各園における多文化状況に応じた保育実践のありようを描出した。その結果、園の多文化状況によって「同化に向かいやすい集団」と「分離に向かいやすい集団」があること、こうした集団の特性の違いが保育の目標や取り組みに影響を与え、同化または分離を回避することを意識した実践が行われている可能性が示唆された。尚、この研究成果は、論文「多文化状況の相違による多文化共生保育実践の多様性の M-GTA による検討」として整理され、2015 年度に学会誌に掲載され、2016 年度の日本乳幼児教育学会第 14 回学術賞を受賞した。

しかしながら、この整理は限定的な状況要因から導き出された結果であり、多文化共生保育の俯瞰的理解のための枠組みを精緻化するためには、より多様な状況要因を取り上げた検証が必要である。特に、文化間摩擦を最小限にし、未来の多文化社会を準備するための模索が必要とされている中、価値観や宗教の違いに着目した検討、様々な人権課題を視野に入れた検討が必要である。

また、2014 年度までの研究において、保育者自身の当事者性が多文化共生保育実践において持つ意味に着目し、来日第二世代以降の在日外国人保育者のライフヒストリーと実践について検討を始めている。保育者自身の当事者性のありようも園の多文化状況に大きな影響を与える要因であり、多文化共生保育実践の俯瞰的理解のために検討すべき課題である。

２．研究の目的

本研究は、多文化共生保育実践の多様性を記述する枠組みの構築を目指した 2014 年度までの研究成果を踏まえ、当初の枠組みを精緻化することを目指している。具体的には、次の点を明らかにすることを目的とする。

1 点目として、多文化共生保育実践の多様性を捉える視点を明らかにし、精緻化の参考にするために、さまざまな種類のマイノリティに関わる人権保育の多様な実践との対話を行い、視点の豊富化を行うことである。（研究課題 1）

2 点目として、価値観や宗教の違いによる文化摩擦を乗り越え、共生を実現するための保育のありかたを検討するために、国際社会における共生を巡る重要課題であり、今後日本国内でも共生の課題となることが予想されるイスラームとの共生に着目し、保育現場における多文化共生のあり方について対話を重ねていくことである。（研究課題 2）

3 点目として、保育者自身の当事者性と多文化共生保育実践のありようを検討するために、来日第二世代保育者（子どもとしての来日経験をもつ保育者）のキャリア形成の過程を描出することである。（研究課題 3）

こうした検討を経て、多文化共生保育実践の俯瞰的理解に向けての視点の豊富化と深化を図ることが本研究の目的である。

３．研究の方法

（１）3 年間の研究の流れ

研究は下記のような流れで展開された。

研究課題１について、1 年次は多文化共生保育やさまざまな人権保育実践との交流を行うためのネットワーク構築に取り組み、1 年次では多文化共生保育と音楽を巡る対話論文の執筆を、2 年次・3 年次においては「特定非営利法人ちゃいるどネット大阪」との共催で実施した「多文化＆障がい共生クロスプロジェクト」を中心とした対話を実施した。

研究課題２について、1 年次はイスラームとの共生に関わる保育研究者とのネットワーク構築を行い、2 年次・3 年次において学会におけるシンポジウムを通して、イスラームとの共生に関わる実践課題抽出のための対話を実施した。

研究課題３について、2014 年度までに実施されてきた来日第二世代保育者への聞き取りデータの分析を 1 年次より継続し、2 年次・3 年次において論文の執筆を行った。

（２）調査方法・内容

研究課題１：多文化共生保育とさまざまな人権保育との対話による視点の豊富化と精緻化

多文化共生保育とさまざまな人権保育との対話による視点の豊富化と精緻化に向けて、下記のような対話を実施してきた。

①多文化保育と音楽を巡る対話論文

作曲家・心理学者・臨床心理士・保育研究者という異なる立場の 4 名が多文化保育と音楽を巡るエピソードについて語りあうことを通じて、論文では表しきれない音楽や保育実践の精妙さを描出した。

②特定非営利法人「ちゃいるどネット大阪」における「多文化＆障がい共生クロスプロジェクト」での対話

「多文化＆障がい共生クロスプロジェクト」は研究者・実践者・保育や教育を志す学生の共同研究の場として設定され、下記のような多様なゲストスピーカを招聘することを通じて、視点の豊富化と課題の抽出に取り組んできた。

- 陣内努氏（元ベトナム社会主義共和国保健省立ダナン医薬技術大学日本語-介護クラス主任・日本語教師）：看護職として日本にやってくることを志すベトナムの学生への日本語指導、ベトナムと日本の文化的相違と共通点、歴史的背景に基づくベトナムの人々の価値観について
- 蔦木文湖氏（東洋哲学研究所）：ドイツの移民政策の動向について
- 三宅優子氏（アトリエ・インカーブ）：障がいと「アート」について

また、下記の公開シンポジウムを実施し、対話を実施した。

- 第１回シンポジウム「多文化社会における保育・教育の課題 ～ドイツと大泉の事例から考える～ 」:2017 年 2 月 5 日に実施。移民を受け入れているドイツの幼稚園の実践から（足利短期大学　佐々木由美子氏）、群馬県大泉町における貧困家庭の子どもへの学習支援について（高崎健康福祉大学/NPO 法人わくわく広場の会理事長　岡本拡子氏）、群馬県大泉町における多文化共生保育について（帝京短期大学　林恵氏）の 3 点の話題提供をいただいた。
- 第 2 回シンポジウム「多文化共生の保育と子育てを考える～ドイツでの子育てと保育から～」:2017 年 7 月 15 日に実施。ドイツ・ライプツィヒ在住の日本人保護者であるヘンケル敦子さん、及びパラオでの保育実践経験があり、パラオと日本のダブルの子どもの親でもある佐藤理恵さんのお二人を中心に、多文化状況での子育てについてお話しいただいた。
- 第 3 回シンポジウム「多文化共生保育の実践的課題を考える～ドイツと大阪の実践から学ぶ～」：2017 年 11 月 14 日に実施。難民の子どもを受け入れているドイツの保育施設の実践について、ドイツ・ライプツィヒにあるヒルデガルトストリート幼稚園のダニエル・ケンプ園長とベリット・ミュール副園長から、大阪市生野区における民族保育の取り組みについて大阪聖和保育園　事務局長・前園長の森本 宮仁子さんから話題提供をいただいた。

また、2017 年 11 月 11 日（土）の日本乳幼児教育学会第 27 回大会において、「保育カリキュラムガイドラインの実施～実践者の視点から」と題した国際シンポジウムに、ダニエル・ケンプ氏・ベリット・ミュール氏が登壇し、研究協力者の戸田有一が通訳を務めた。ここでは、ドイツ・ザクセン州におけるカリキュラムとその実践について、移民/難民の宗教的にも多様な子どもが在籍するライプツィヒの幼稚園における実践の報告を行った。また、韓国におけるヌリ課程、フランスにおける取組についての話題提供を受け、保育における公的なガイドラインの導入について議論を行った。

研究課題２：保育現場におけるイスラームとの共生の模索

イスラームとの共生の模索をテーマとしたシンポジウムを、日本乳幼児教育学会及び日本保育学会で実施した。

- 第 26 回日本乳幼児教育学会自主シンポジウム「保育現場におけるイスラームとの共生の模索」は 2016 年 11 月 27 日に実施。蔦木文湖氏（東洋哲学研究所）からはドイツにおける移民統合政策について、星順子氏（新渡戸文化短期大学）からは中東における保育実践について、長澤貴氏（鈴鹿大学短期大学部）からは、三重県の仏教系保育園に在籍するムスリムの子どもの保育についての聞き取り調査の結果についての話題提供が行われた。
- 第 70 回日本保育学会自主シンポジウム「保育現場におけるイスラームとの共生の模索Ⅱ」は 2017 年 5 月 15 日に実施。白石雅紀氏（東京未来大学）からイスラーム世界の多様性の観点から見た保育における共生のあり方について、岡本拡子氏（高崎健康福祉大学）からはドイツ NRW 州における移民・難民の子どもの保育について、星順子氏（新渡戸文化短期大学）からは、日本におけるムスリムの子ども・保護者への支援についての話題提供が行われた。

研究課題３：来日第二世代保育者のキャリア形成と実践について

来日第二世代保育者のアイデンティティの揺れやキャリア形成に関する内容を含む語りの TEM による分析により浮かび上がる分岐点や主体的選択から、これから続く来日第二世代保育者やその周囲の人々に貢献しうる示唆を得ることを目的に、関東地方の在日外国人集住地域の保育現場に勤務する 3 名の来日第二世代保育者（3 名とも子どもの頃に日本に来日）の語りをもとに、保育者として、かつ、外国にルーツがある者としてのアイデンティティの揺れと、その揺れに伴いつつ深化すると考えられる外国人保育者としてのキャリア形成の過程を TEM(Trajectory Equifinality Modeling：複線経路・等視性モデリング)(安田・サトウ 2012、安田ら 2015)

により可視化した。

４．研究成果

研究課題１：多文化共生保育とさまざまな人権保育との対話による視点の豊富化と精緻化

多文化共生保育とさまざまな人権保育との対話からは、人々の多様性を捉えるにあたって、価値観・行動規範・信仰・言語・芸術文化などの文化的側面、障がい・ジェンダー・貧困などの社会的側面への視点など多様な側面があるが、自己が持つ属性がマイノリティに属する場合であっても、こうした少数派としての属性がさまざまな生きづらさや困難さにつながるがどうかは、当事者が暮らしている「場」の特性によって異なることが示された。また、マイノリティとしての属性が複合的に重なりあう事例（たとえば、母子家庭・貧困・在日外国人・障がい者）についても検討する中で、必要な支援をどのように捉えるべきであるかについての議論の必要性が示唆された。さらに、人々の持つ多様性はさまざまな対立・摩擦を生み出すきっかけとなる可能性があるが、こうした対立と摩擦はマイノリティとマジョリティ間のみならず、マイノリティ間でも起こりうることが示唆された。

研究課題２：保育現場におけるイスラームとの共生の模索

2 回のシンポジウムでの話題提供は、大別すると「ムスリムの人々が持つ価値観とその多様性」「中東における保育実践」「ドイツにおける移民統合政策と、ムスリムの子ども・保護者に対する保育実践・子育て支援」「日本におけるムスリムの子ども・保護者に対する保育実践や支援」の 4 点であった。

こうした話題提供から、保育現場におけるイスラームとの共生に関わって、次のような示唆が得られた。

まず、保育現場においてイスラームの価値観を理解することの重要性が挙げられる。保育者自身が、ムスリムの人々にとって「信仰」が持つ意味とその内容を理解することや、日本社会と共通した価値と異質な価値があることを理解することで初めて、共生の課題を見出すことが可能になるといえる。しかしながら、「ムスリム」の人々の中にある多様性を理解することも同時に重要であり、保育者はイスラームの価値観や行動規範の原則を理解しつつ、その中にある個別性を理解することで、個々の子どもや保護者に応じた支援が可能になる。このことと関連して、保育者が中東のイスラーム社会における保育実践のあり方について、日本とは異なる子ども観・保育観があることを理解することも求められる。

こうしたイスラームへの理解に基づいて、保育者が目の前のムスリムの保護者と子どもの現状を理解することが重要になる。その際、ムスリムの保護者や子どもが抱えている困難には変化しやすい困難と変化しにくい困難があり、園での疎外感（他の保護者等との関係性に起因）や習慣の違い（園の対応に起因）といった変化しにくい困難があることを理解することが重要である。また、「共生」を模索するドイツの取り組みからは、移民や難民の親子に対する公的支援やイスラームの価値観を尊重した支援、言語教育を軸に置いた「統合」政策などの取り組みが一定の効果を挙げていること、その一方で支援の対象でない人からの不満や、支援がすべてに行き届かない課題があることなど、「共生」の可能性と難しさに対する示唆を得ることができた。

シンポジウムにおける討議の際に、民族・文化・信仰などの違いは価値観や行動規範の違いと深く関連しており、多様な価値観が交錯する場である保育現場においては、さまざまな対立と摩擦が生起する可能性があるが、こうした対立と摩擦は、マジョリティとマイノリティ間の価値観の対立や摩擦に関わって生起するだけではなく、イスラームと LGBT（SOGI）など、マイノリティ間においても生起する課題であることが確認された。摩擦・対立・抑圧を超えて共生を模索することが多文化共生保育の中核的課題であるが、こうしたマイノリティ・コンフリクトを保育現場においていかに捉えるのかが多文化共生保育を巡る重要な課題であることが示唆された。

また、価値観や行動規範を巡る課題は、各園の多文化状況・保育者自身の当事者性・非当事者性のありようによって異なる可能性があることから、「場」や「人」の特性に応じた課題の所在と実践のありように着目した多文化共生保育研究の必要性が示唆された。

研究課題３：来日第二世代保育者のキャリア形成と実践について

研究課題３については、林恵・佐々木由美子・卜田真一郎・戸田有一（2018　印刷中）「来日第二世代保育者におけるアイデンティティの揺れとキャリア形成のナラティブ:TEM による描出と考察」として整理され、日本保育学会の学会誌である「保育学研究」に投稿し、掲載が決定している。

来日第二世代保育者のライフヒストリーと実践についての語りを TEM により描出した上で、外国人保育者としての当事者性が外国人保育者としてのキャリア形成に与える影響、外国人保育者としてのアイデンティティ形成に影響を与える要因について考察した。まず、来日第二世代保育者としての当事者性が外国人保育者としてのキャリア形成に及ぼす影響を、エドガー・ヘンリー・シャイン(Edgar Henry Schein)が提唱するキャリア形成の概念であるキャリア・アンカーの視点から考察した。保育者一般のキャリア・アンカーの特徴としては、「①専門・職能別コンピ

タンス：子どもが好きだった・絵を描くこと自然が好き・自分の得意な領域で自分の技能を活用できる実践の場を自ら選んだ」と「②奉仕・社会貢献：誰かの役に立ちたい・子どもたちみんなが幸せに育ってほしい」といった 2 つのキャリア・アンカーがあり、「保育という世界において奉仕的精神を持ち仕事を遂行する意識が強い」ことが指摘されている（平松・横尾　2015）が、来日第二世代保育者のキャリア・アンカーは、それに加えて、「母国語を話すことができる」という自分の技能の活用(専門・職能別コンピタンス)や、「外国にルーツのある子どもやその保護者」の役に立ちたいという思い(奉仕・社会貢献)があるという特徴が明らかになった。こうした来日第二世代保育者のキャリア・アンカーは「自分自身の来日当時の経験と重なる子どもの姿との出会い」がきっかけとなっており、来日第二世代保育者は、その当事者性から、外国人の子どもや保護者の役に立つことができる「外国人保育者」としての役割を確立していることが描出された。

ただし、外国人保育者としてのアイデンティティ形成は、外国人保育者として期待される役割が遂行できるかどうかによって影響を受けることも示唆されており、外国人保育者としての役割が「言語(母国語の能力)」に集約される形で意識されているが故に、母国語能力に対する自信の度合いが、外国人保育者としてのアイデンティティ確立に影響を与えていることがうかがえた。こうした結果から、来日第二世代以降の保育者が、母国語を(再)獲得あるいは保持する努力をどのように支え、どのように活かす機会を準備するかが、園や養成校に問われていることも指摘された。

外国人保育者のキャリア形成の難しさは、「保育者としてのキャリア形成」と「外国人保育者としてのキャリア形成」の双方が求められるという点にある。特に、外国人保育者としてのキャリア形成に関しては、外国人保育者のイメージ形成の難しさ、ロールモデルの持ちにくさという課題があることを念頭に置く必要がある。外国人保育者の場合は同様の支援に加えて、外国人保育者特有のアイデンティティの揺れやその形成の難しさを踏まえた管理職などの受容や理解が必要であることが示唆された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 林恵・佐々木由美子・卜田真一郎・戸田有一．(採択　2018 掲載予定)．来日第二世代保育者におけるアイデンティティの揺れとキャリア形成のナラティブ: TEM による描出と考察．保育学研究，56(2)．

② 朴守賢・卜田真一郎・藤原梨絵・戸田有一．(2016)．多文化保育と音楽をめぐるエピソードの協奏の試み．エデュケア 36，9-22，大阪教育大学 幼児教育学研究室．

③ 卜田真一郎・平野知見・臼井智美・戸田有一．(2015)．多文化状況の相違による多文化共生保育実践の多様性のM-GTAによる検討．乳幼児教育学研究，24，21-37．

〔学会発表〕（計 4 件）

① 卜田真一郎・戸田有一・平野知見・白石雅紀・岡本拡子・星順子・三木健郎. 2017. 自主シンポジウム「保育現場におけるイスラームとの共生の模索」. 日本保育学会第 70 回大会. 2017 年 5 月 21 日

② 卜田真一郎・戸田有一・蔦木文湖・星順子・長澤貢・平野知見. 2016. 自主シンポジウム「保育現場におけるイスラームとの共生の模索」. 日本乳幼児教育学会第２６回大会. 2016 年 11 月 27 日

③ 林恵・佐々木由美子・知念みどり・尹愛順・卜田真一郎（2016）自主シンポジウム「外国人保育士の育成とこれからの役割―多文化が一般化される未来に向けて―」日本保育学会第 69 回大会. 2016 年 5 月 8 日

④ Shin-ichiro Shimeda・Tomomi Hirano・Tomomi Usui・Yuichi Toda（2016）“Variations of multicultural childcare practice alongside with a difference of the multi-cultured situation: An examination by M-GTA” The 31th International Congress of Phycology（国際学会）2016/7/26 Pacifico Yokohama in Yokohama, Japan

〔図書〕（計 1 件）

① 卜田真一郎．(2017)．多様性に寄り添う専門性．寺田恭子・榊原志保・高橋一夫(編著)『保育・教職実践演習:わたしを見つめ、求められる保育者になるために』所収,110-114．ミネルヴァ書房．

６．研究組織

(1)研究代表者

卜田　真一郎（SHIMEDA Shinichiro）
常磐会短期大学・その他部局等・教授
研究者番号：20353021

(2)研究分担者

平野　知見（HIRANO Tomomi）
京都造形芸術大学・芸術学部・准教授
研究者番号：10441122

長澤　貴（NAGASAWA　Takashi）
鈴鹿大学短期大学部・生活コミュニケーシ

ョン学科・教授
研究者番号：20515134

(3)連携研究者

戸田有一（TODA Yuichi）
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：70243376